柏原市遺跡群発掘調査概報

２０００年度

２００１年3月

柏 原 市 教 育 委 員 会

例言

1. 本書は柏原市教育委員会が2000年度に実施した船橋遺跡2000-１次と、過去に実施した平尾山古墳群1993-１次、同1993-２次、大県遺跡1998-７次、奥山遺跡1997-１次の発掘調査概報である。
2. 調査は柏原市教育委員会社会教育課石田成年が担当した。
3. 本書図中の方位は磁北、標高はＴ.Ｐ.である。
4. 第３章において、八尾市立曙川小学校教諭奥田尚氏から玉稿を賜った。記して謝意を表します。

目次

第１章　船橋遺跡 …… 1
第２章　平尾山古墳群 …… 2
第３章　大県遺跡 …… 12
第４章　奥山遺跡 …… 22

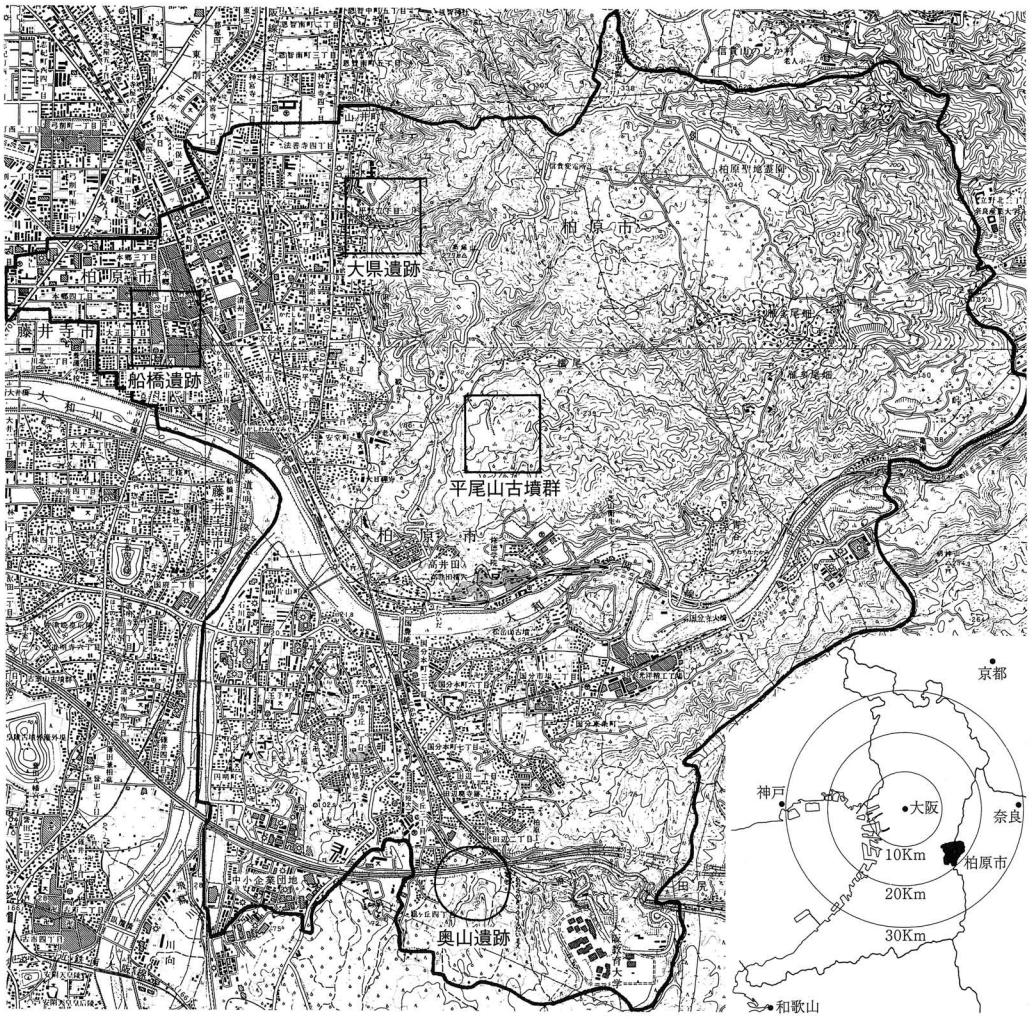

図１　柏原市位置図

第１章　船橋遺跡

2000-１次調査

・調査対象地　柏原市大正３-637-１の一部　他

・調 査 期 日　2000年９月28日～10月２日

・対 象 面 積　826.45㎡

１.調査概要

当該調査は店舗新築工事に伴う発掘調査である。

当該地周辺では現地表下120㎝付近を検出面として、時期用途とも不明の土坑が現れることが多く、南に接する柏原郵便局移転新築工事に伴う発掘調査においても溝状あるいは方形の土坑を17基検出した(『柏原市遺跡群発掘調査概報』柏原市文化財概報1994-Ⅳ)。本調査に先立ち７月28日に実施した試掘調査でも同様の土坑を検出したことから、浄化槽部分（40.4㎡）について発掘調査を実施することとした。なお建物本体部分については基礎深度が遺構検出面に達しないことから工事時に立ち会うこととして、断面観察のみにとどめた。

掘削箇所は敷地の西端にあたる。現地表下約100㎝において、暗緑灰色砂質土層を穿ち、砂を埋土とする土坑を２基検出した。うち１基は調査区外へ続く。いずれも南北方向に長い。調査区中央の１基は長さ440～470㎝、幅185㎝、深さ57～86㎝を測る。南半ではさらに深く掘られている。約30㎝の単位をもって段々に掘削されたようである。土坑の用途、目的は不明である。

図２　対象地位置図（Ｓ＝１／7500）

写真１　遺構（西から）

写真２　作業風景

第２章　平尾山古墳群

1993-１次調査

・調査対象地　柏原市雁多尾畑5622　他５筆

・調 査 期 日　1993年１月６日～１月13日

・対 象 面 積　2,195.00㎡

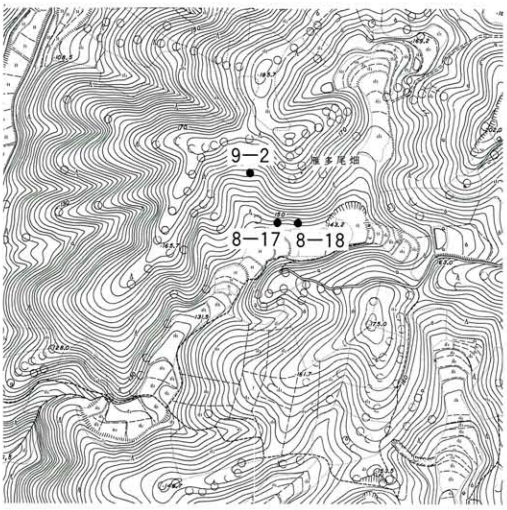

図3　対象地位置図（Ｓ＝１／7500）

１.調査概要

当該調査は農地改良工事に伴う発掘調査である。1992年末、東山山中で山を削り、工事用進入路の工事が行われているとの通報が市民から寄せられた。現地に赴き、開口する古墳１基を工事地内に確認した。工事については文化財保護法に基づく届出がないまま着手されていたことから、まず工事の一時中止を求め、届出と調査が必要である旨指導した。そして原因者負担事業として契約を締結した後、調査に着手した。調査に要した諸費用は依頼者である古河組の負担による。

本墳は大阪府教育委員会が1974年に実施した分布調査（『平尾山古墳群分布調査概要』大阪府文化財調査概要1974-11　大阪府教育委員会　1975年３月）によるところの「平尾山古墳群平尾山第９支群２号墳」である。標高は石室床面で約165.5mである。

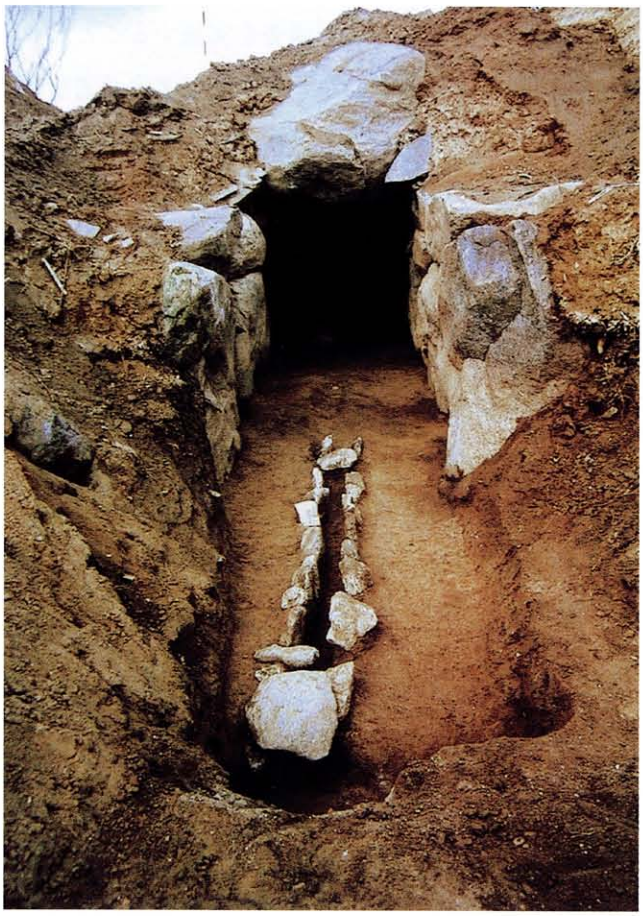

写真３　全景（南から）

２.石　室

墳丘は調査着手時には工事によりすでに失われており、原況は全く知りえない。

石室は南に開口する両袖式の横穴式石室である。規模は石室現存長820㎝、玄室長340㎝、玄室幅230～250㎝、玄室高220～270㎝、羨道長480㎝、羨道高180㎝、羨道幅160～180㎝をそれぞれ測る。平面的

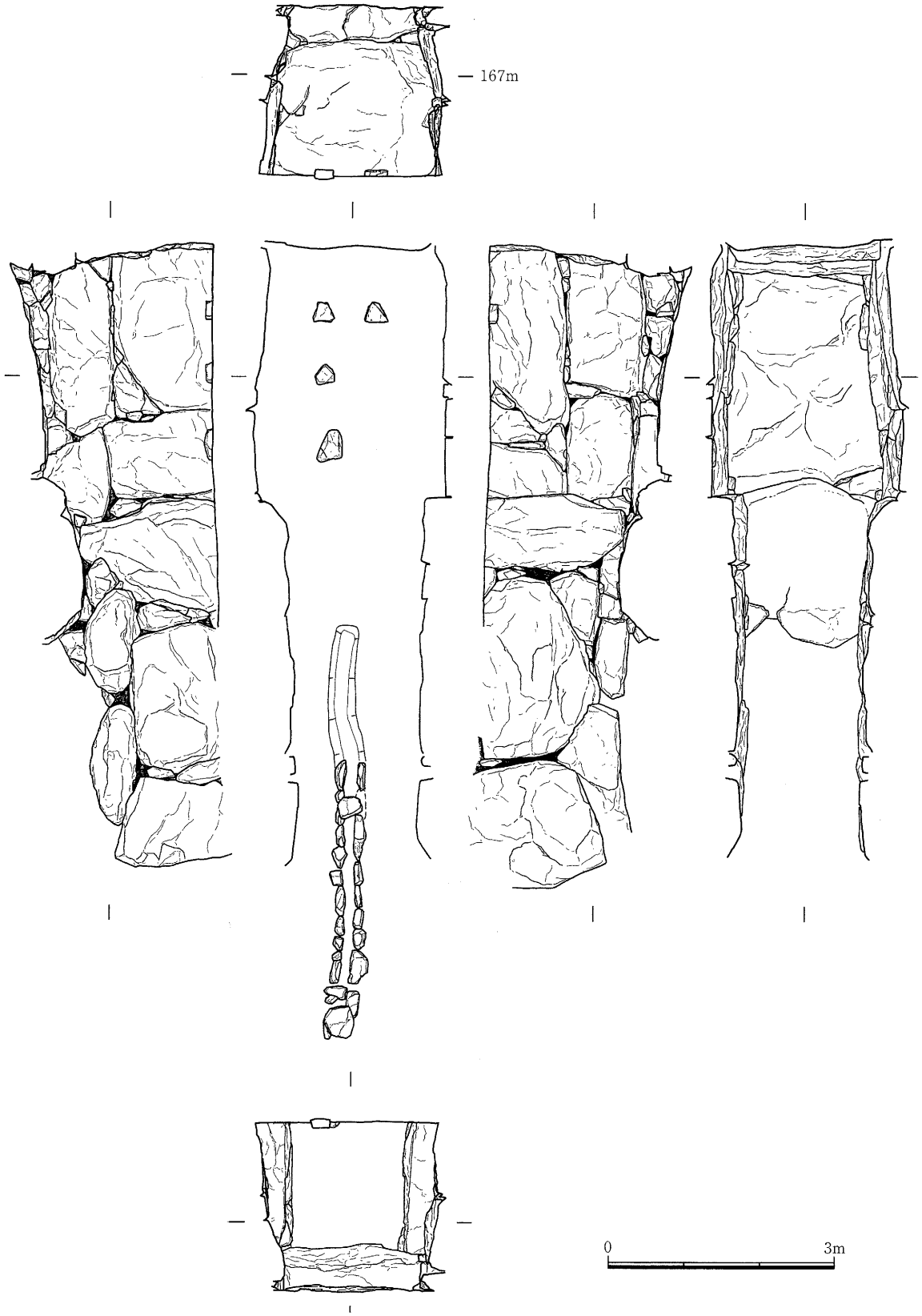

図4　9－2号墳

には左側壁側が直線的に構成されているように見える。左側壁を基準に石室が構築されたのであろうか。玄室の天井石は１石、また羨道の天井石は１石のみ遺る。本来は２～３石が架構していたのであろう。

玄室内には厚さ50～70㎝の流入土があり、凝灰岩片が混入していた。玄室中央には棺台と思われる石が４点遺っていた。本来６点で構成されていたのであろうか。これらが棺台として機能し、長さ210㎝、幅100㎝前後を測る石棺が安置されていたと思われる。この棺台の周囲には、径５㎝ほどの小礫が敷かれていた。

羨道中央近くから石室外に向けて排水溝を検出した。現存長は550㎝である。北端130㎝については溝状に掘削されているのみである。それより南は溝の両側に石を立て並べ、さらに上部に石を載せている箇所がある。ただし調査着手時には３石を確認したのみである。内部に底石や礫の充填はない。

出土遺物のうち土器４点を図示した。１は須恵器短脚高坏。器高7.6㎝、口径9.3㎝を測る。２、３は須恵器坏。２は器高3.9㎝、口径14.2㎝を測る。３は器高4.2㎝、口径12.3㎝を測る。４は土師器壺で排土中から採取した。表面全体の摩滅が著しく調整等は不明である。これら土器類の他に釵子と思われ

写真４　玄室

写真５　玄室右側壁

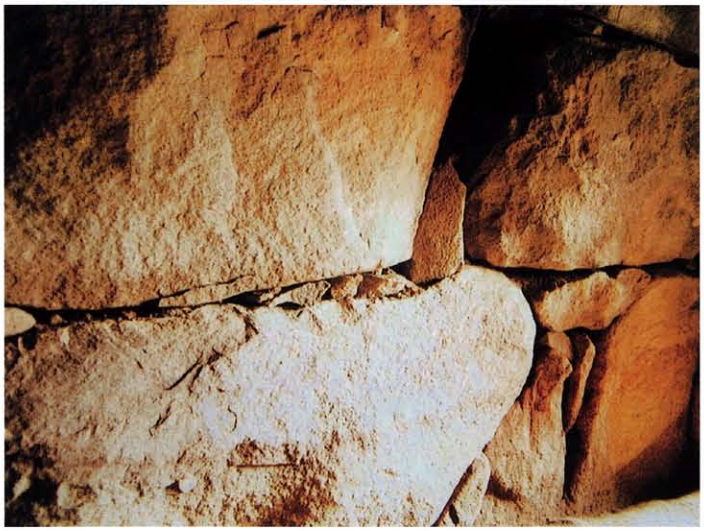

写真６　玄室左側壁

る、針状を呈する金属製品がある。径約0.2㎝、長さ8.5㎝以上で両端部は欠損している。図５に×印で示した箇所からの出土である。

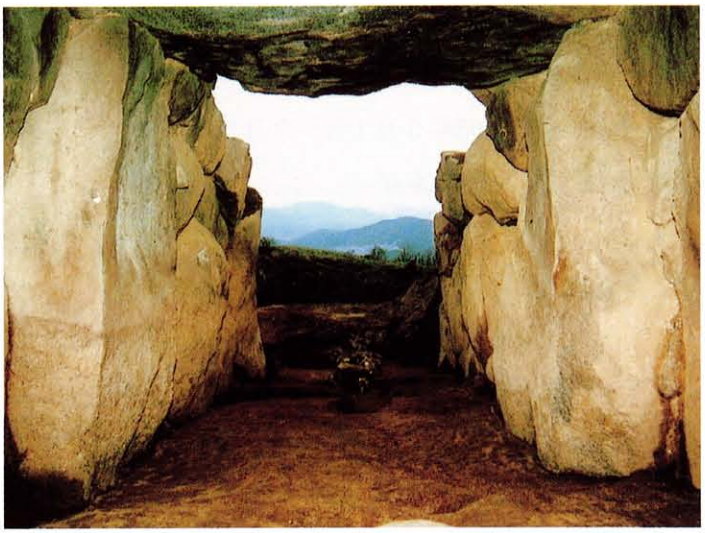

写真７　羨道

写真８　鈒子

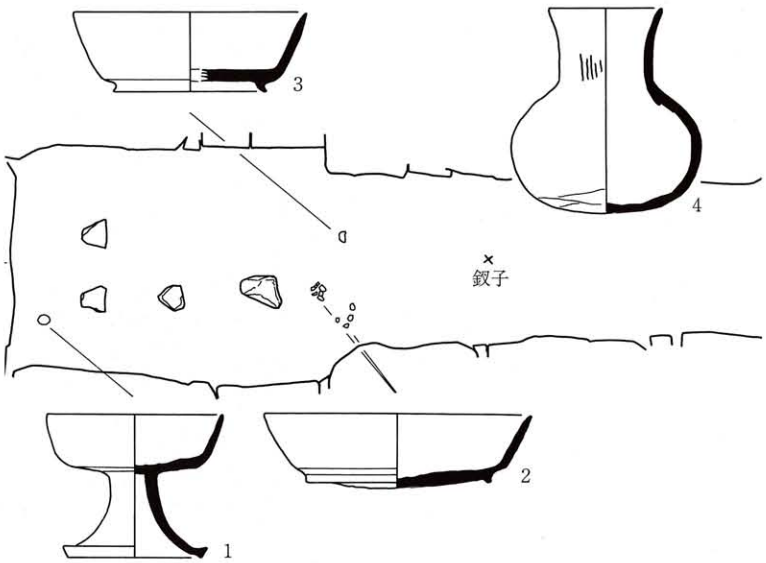

図５　出土遺物（Ｓ＝１／４）

1993-2次調査

・調査対象地　柏原市青谷1677　他

・調 査 期 日　1993年3月1日～3月12日

・対 象 面 積　9,890.00㎡

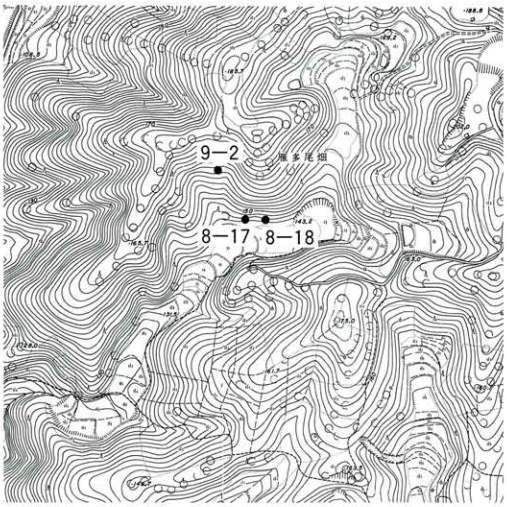

図6　対象地位置図（S＝1／7500）

1. 調査概要

当該調査は農地改良工事に伴う事前発掘調査である。工事内容は谷部を埋めることで地盤を嵩上げし、農地を改良しようとするものである。事前の踏査で対象地内に開口する2基の古墳を確認 した。しかし工事によりそれらは完全に埋没し、通常望見できうる状況ではなくなるものであった。事業者である古河組と協議し、古墳については調査後、保存の措置を執り、また工事を慎重に実施するよう指導した。保存がはかられることになったことから、本事業は市単独事業として実施した。

本墳は大阪府教育委員会が1974年に実施した分布調査（『平尾山古墳群分布調査概要』大阪府文化財調査概要1974-11　大阪府教育委員会　1975年3月）によるところの「平尾山古墳群平尾山第8支群17号墳」と「同18号墳」である。

調査終了後、両墳とも土嚢により入口部を厳重に閉塞し、埋没に耐えうるような措置を執った。

写真9　全景（南から）

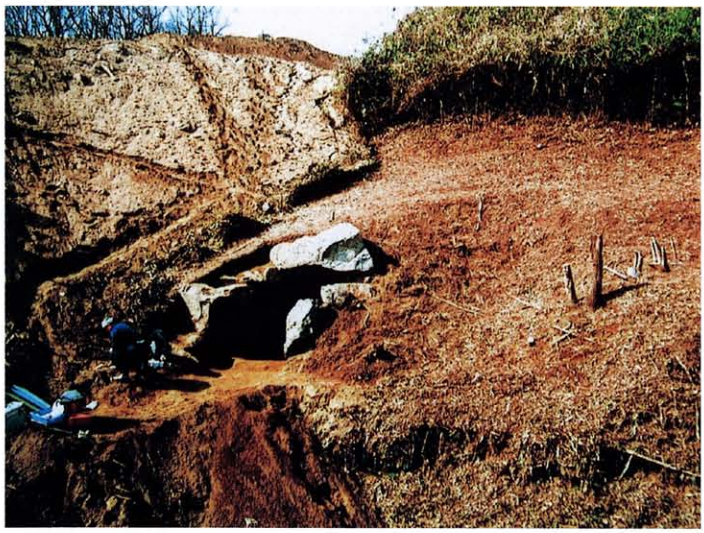

写真10　全景（東南から）

2. 第8支群17号墳

本墳は床面での標高154.4m、南向きの斜面にある。

墳丘の確認のため古墳の北側に調査区を設定し、地山まで掘削した。調査区北半では地山は現地形

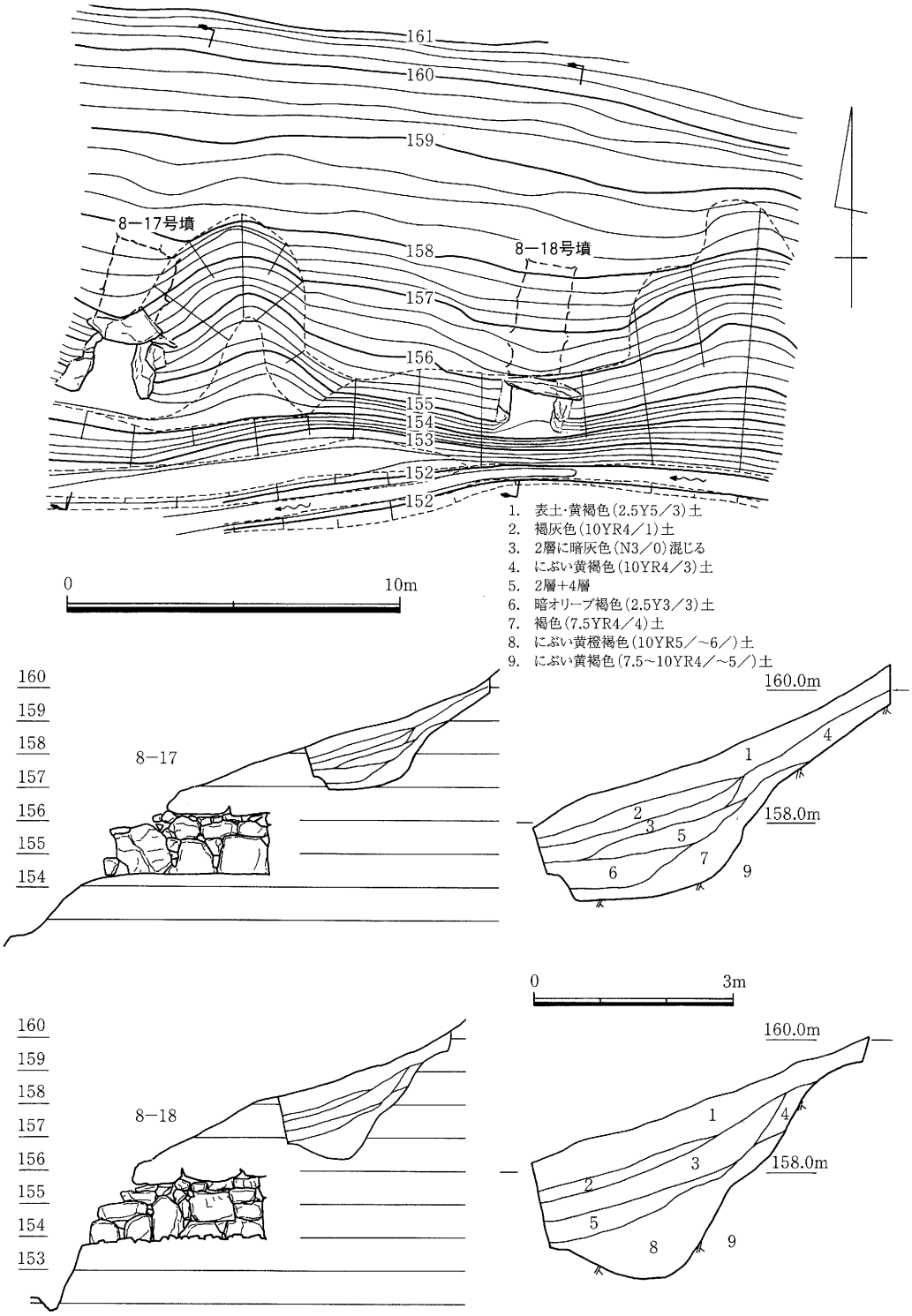
161
160
159
158
157
156
155
154
153
152
152
8−17号墳
8−18号墳
0
10m
1. 表土・黄褐色(2.5Y5／3)土
2. 褐灰色(10YR4／1)土
3. 2層に暗灰色(N3／0)混じる
4. にぶい黄褐色(10YR4／3)土
5. 2層+4層
6. 暗オリーブ褐色(2.5Y3／3)土
7. 褐色(7.5YR4／4)土
8. にぶい黄橙褐色(10YR5／~6／)土
9. にぶい黄褐色(7.5~10YR4／~5／)土
8−17
160.0m
158.0m
0
3m
8−18
160.0m
158.0m

図7　対象地地形図

写真11　8－17写真

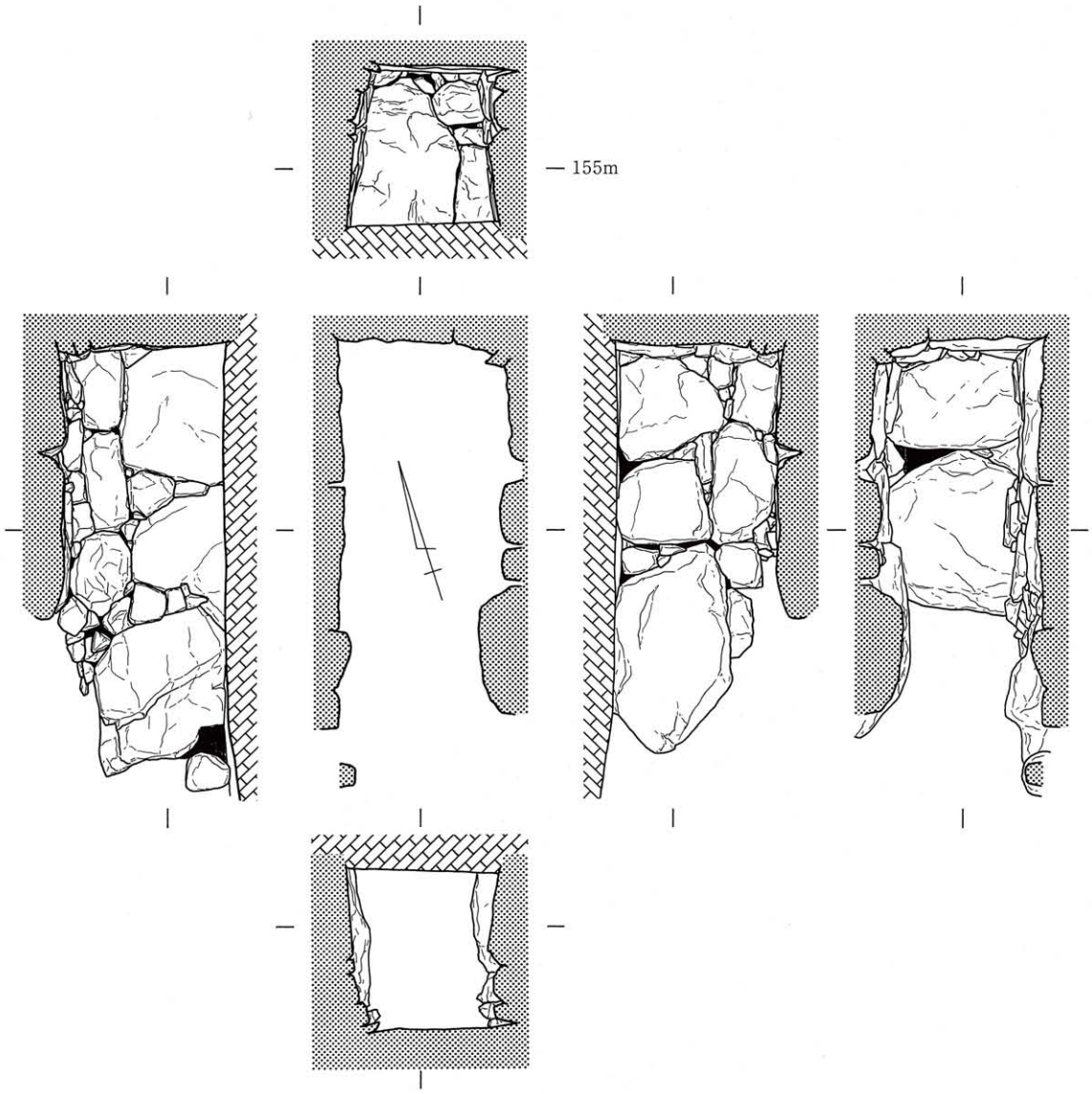

図8　8－17号墳（S＝1／80）

の傾斜よりやや角度を持ち、奥壁から約420㎝北、標高157.5m付近で角度を緩やかにする。封土や石室掘形の状況は明瞭には認められなかった。

主体部は南に開口する横穴式石室である。規模は石室現存長430㎝、幅140～190㎝、高さ180㎝をそれぞれ測る。平面的には右側壁が直線的である。これは奥壁の状況からも奥壁、右側壁を基準に構築されたことを示すものと思われる。両壁とも奥から３石目が内に突出しており、それをもって袖としているのであろうか。床面には敷石、排水溝等の施設は認められなかった。

遺物として鈹子が１点出土した。

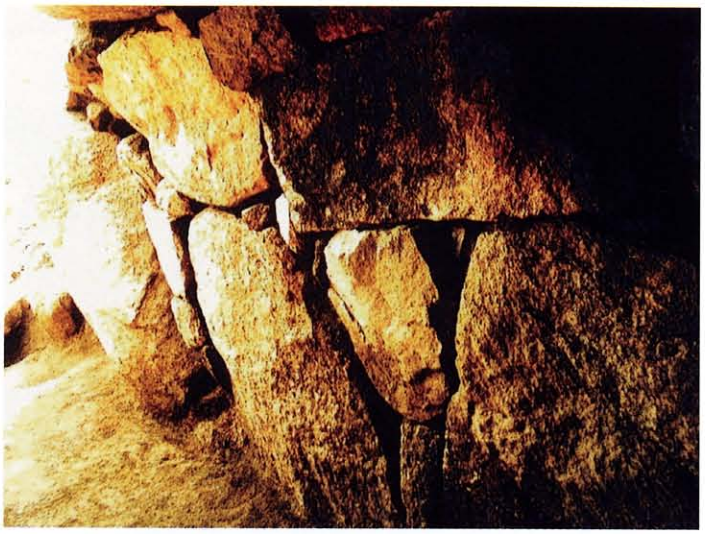

写真12　玄室右側壁

写真13　閉塞作業

３．第８支群18号墳

本墳は床面での標高154.0m、南向きの斜面で、先述の第８支群17号墳の東方約13mにある。

墳丘の確認のため古墳の北側に調査区を設定し、地山まで掘削した。地山は159.5m付近から急角度で落ち、奥壁から約250㎝北、標高156.4m付近で最も低い。一端上昇し、奥壁方向に向かうのであるが、封土や石室掘形の状況を確認するには至らなかった。

石室は南に開口する無袖の横穴式石室である。規模は石室現存長500㎝、幅140㎝、高150～180㎝をそれぞれ測る。左右両側壁を比較すると、右側壁の方が整然と構築されている。石室前面については、両側壁、天井石とも採石によるものであろうか、失われている。

床面には敷石が全面に敷かれていた。大きさは最大80㎝前後を測るものから拳大まで様々である。床面については敷石を除去しての掘削は行わなかったため、それ以下の状況は不明である。しかし石材の長辺を主軸に直交させて石室主軸方向に並べたような石列が見える。排水溝の蓋石の可能性がある。この蓋石のみが突出することに対し、床面全面に石を敷くことで平面を形成しているかのようである。

出土遺物（図10）は土器、鉄製品である。土器は須恵器高坏１点と土師器坏２点。須恵器高坏は

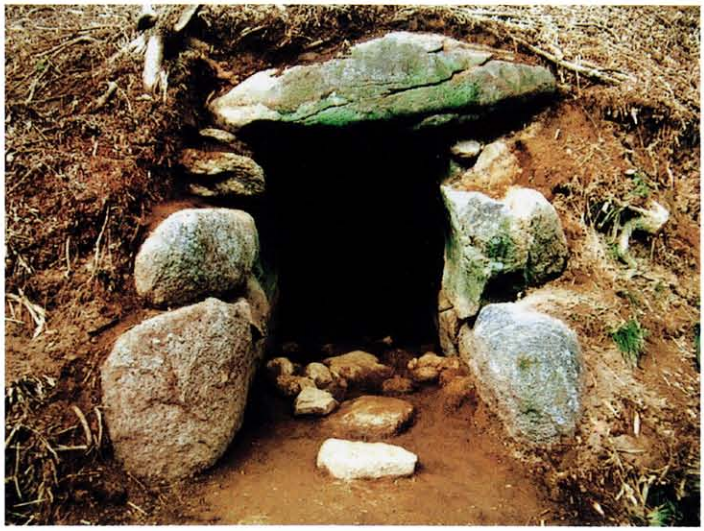

写真14　8－18号墳

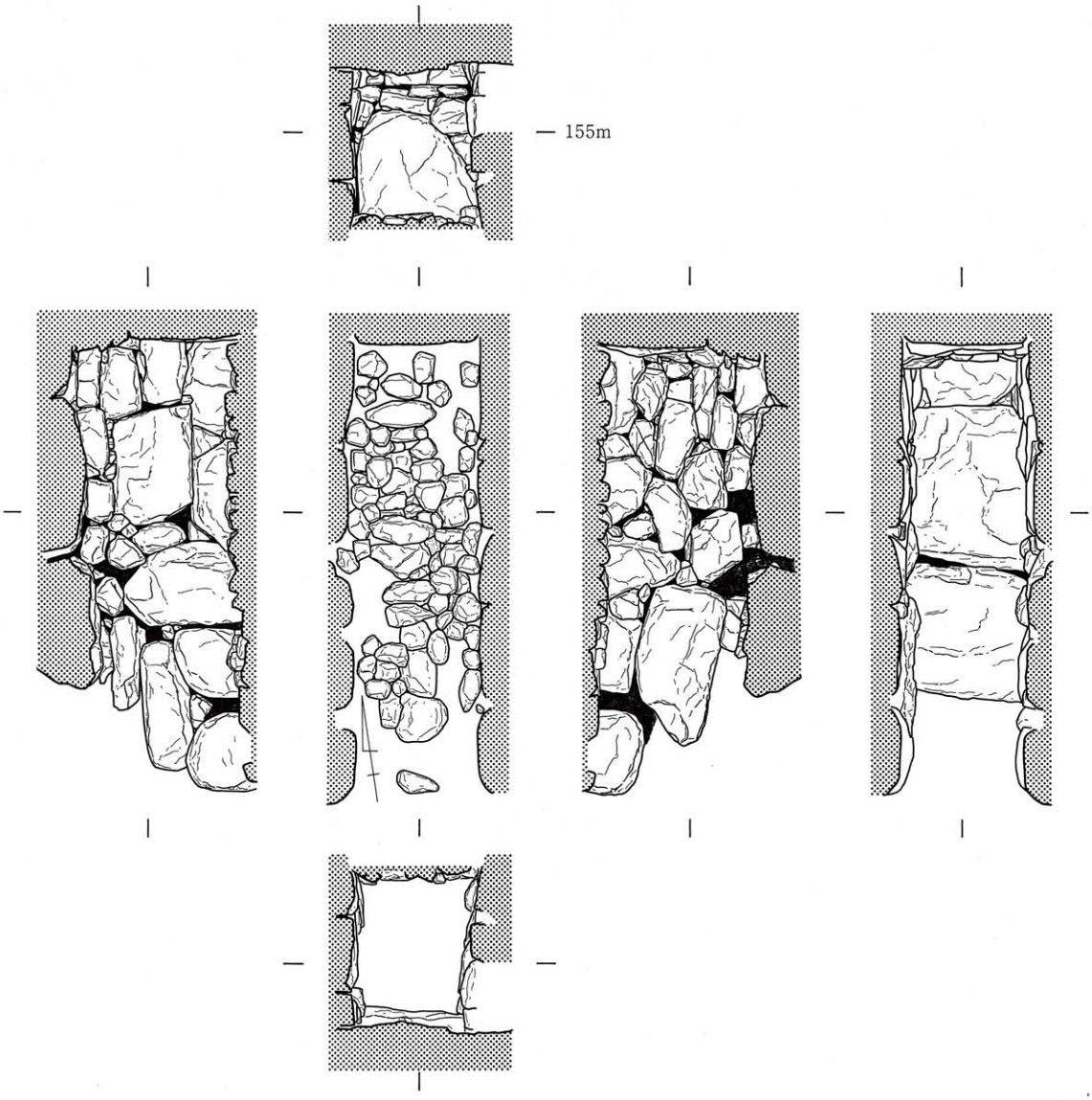

図9　8－18号墳（S＝1／80）

坏部脚部の接合部の破片で、長方形の透かしが２方にあく。土師器坏は坏内部にナデの後、放射状の暗文を施す。

鉄製品は鋏１点と釘５点である。鋏は一方の屈曲部を遺すのみで両端を欠く。釘５は長さ10.8㎝、断面は方形で、先端を屈曲させた形状のものである。棺材の木質が付着し、木目はヨコ方向である。釘６～９は頭が円形のもの。６のみ完形で長さは7.0㎝。その他は先端を欠損している。木質が付着するものもあり、７はタテ方向、８はヨコ方向の木目である。

写真15　玄室

写真17　鋏子

写真16　床面敷石

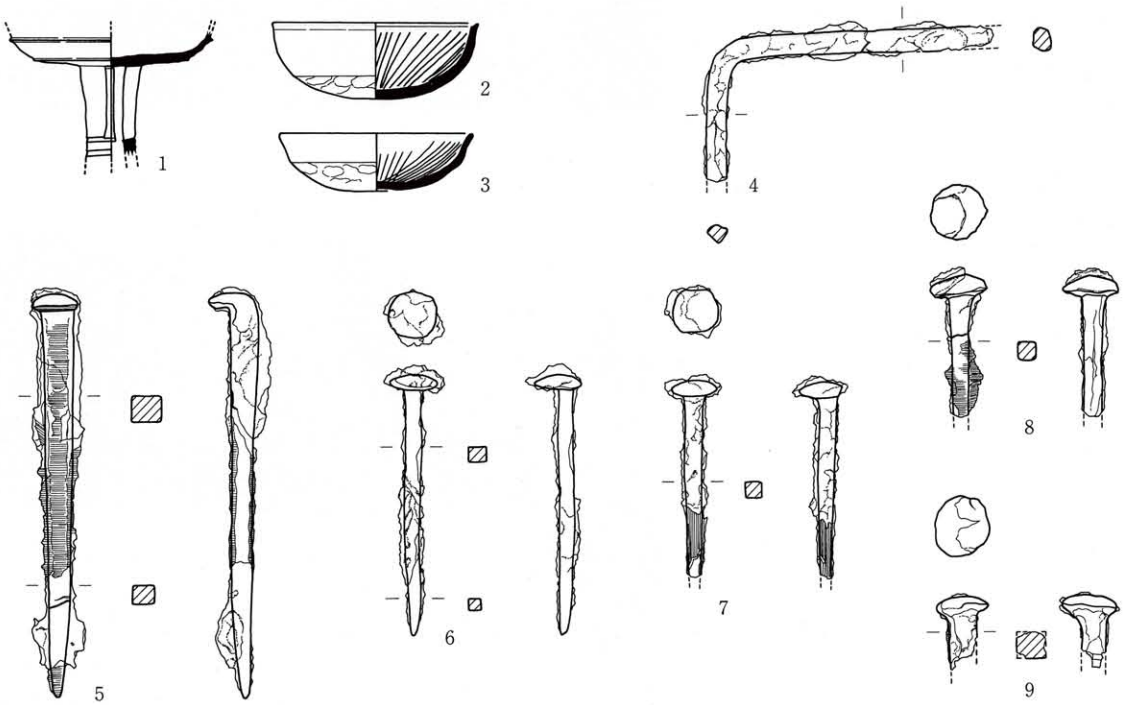

図10　出土遺物（土器　S＝１／４、鉄製品S＝１／２）

第３章　大県遺跡

1998-7次調査

・調査対象地　柏原市平野2-369-3　他

・調 査 期 日　1998年10月７日～11月９日

・対 象 面 積　1,461.00㎡

１.調査概要

柏原市平野2-369-3他における宅地造成に伴う調査である。調査対象面積は1,461.00㎡。依頼者から作業員の提供を受け、10月７日に着手した。遺跡地図上での対象地の遺跡名は「大県遺跡」であるが、調査の対象となったのは「平尾山古墳群平野大県第６支群１号墳」と「同２号墳」（『平尾山古墳群分布調査概要』大阪府文化財調査概要1974-11　大阪府教育委員会　1975年３月）である。なお墳丘は調査着手時には工事によりすでに失われており、原況は全く知りえない。また調査中の11月９日には現地に赴くとすでに古墳が２基とも撤去されており、そのため墳形、規模等の詳細な情報を得られなかった。特に２号墳については石室埋土掘削途上の撤去であり、石室構造、床面状況等、詳細を全く知り得なかった。

現地調査では、依頼者である大橋建設から作業員の提供を受けた。

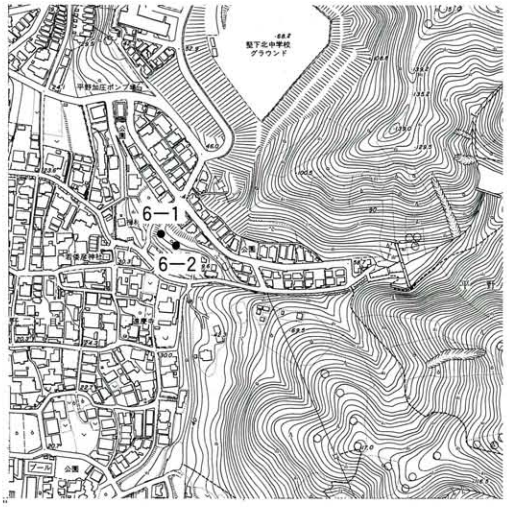

図11　対象地位置図（Ｓ＝１／7500）

写真18　全景（南から）

写真19　６－２号墳近景

写真20　6－1号墳

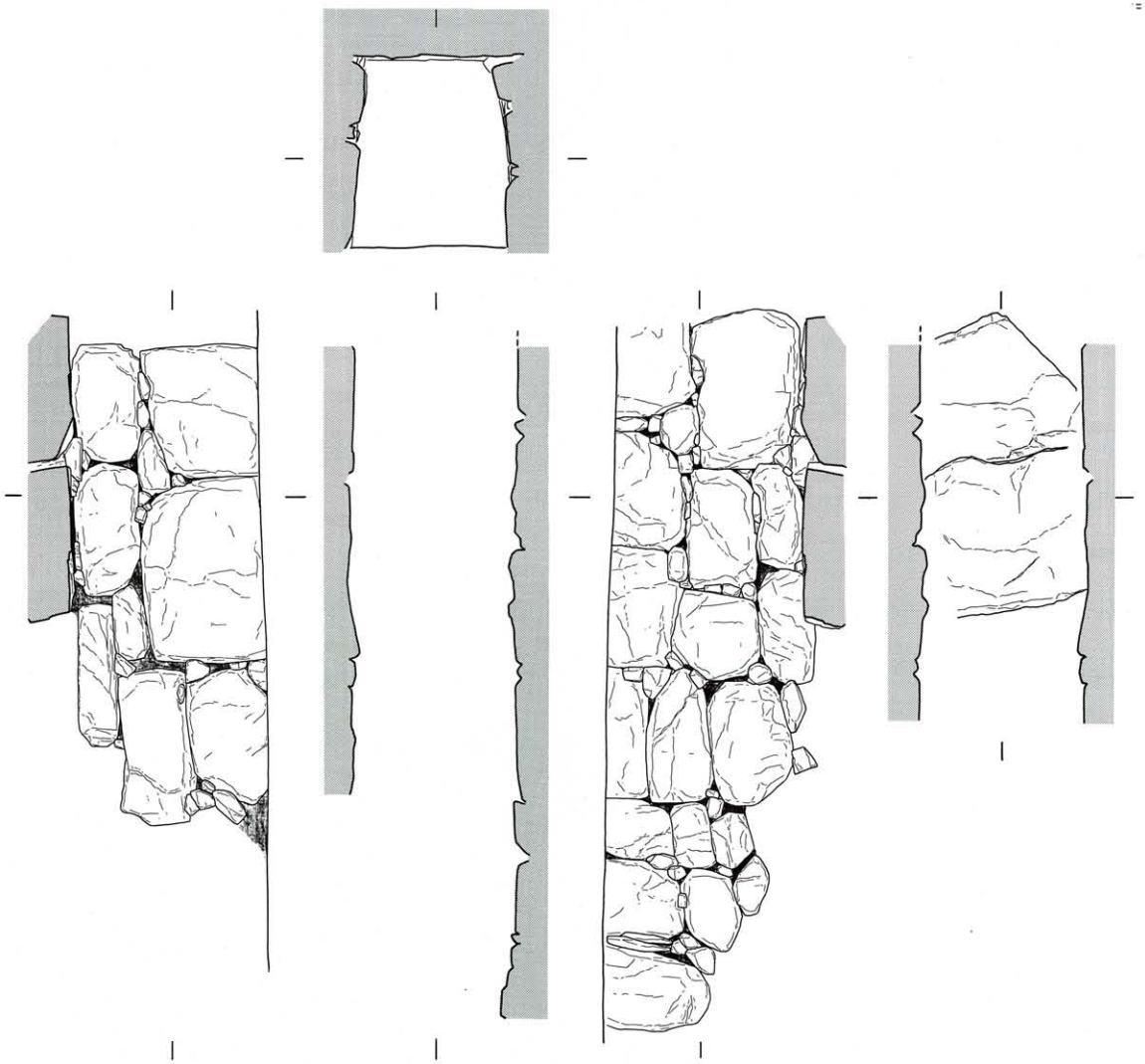

図12　6－1号墳（S＝1／80）

2.第6支群1号墳

急峻な南向きの斜面上にある。1号墳は無袖の横穴式石室で、石室長700㎝以上、幅170㎝、高さ200㎝を測る。主軸は磁北から西に約3°振っている。奥壁は調査着手時にはすでに無く、側壁の一部や天井石と同様に、盗掘か採石に伴い撤去されたようである。厚さ約80㎝の石室埋土には、石棺材として使用されていたと思われる石材が細かく砕かれて混在していた。

右側壁には大きさ200㎝×130㎝の石材をはじめ
比較的大きな部材を使用している。床面には敷石、排水溝等の施設は認められなかった。

出土遺物（図14・15）は須恵器26個体で、ほとんどが奥壁から約400㎝南の西壁に接する箇所に集中していた。埋葬に伴って置かれた様子ではなく、片付けられ無造作に積み重ねられているかのような状態であった。なお調査中に須恵器高坏の坏部1点を盗難で失った。

須恵器蓋1～9の法量は器高5.3～5.8㎝、径15.5～16.3㎝を測る。これらは有蓋高坏10～17とセットとなるものであろう。須恵器蓋25は集積された一群ではなく、奥壁に近い石室中央近くでの出土である。出土箇所は異なるが台付長頸壺26とセットになるものであろうか。外面に2条のヘラ記号がある。

有蓋高坏10～17は、器高19.9～

写真21　右側壁

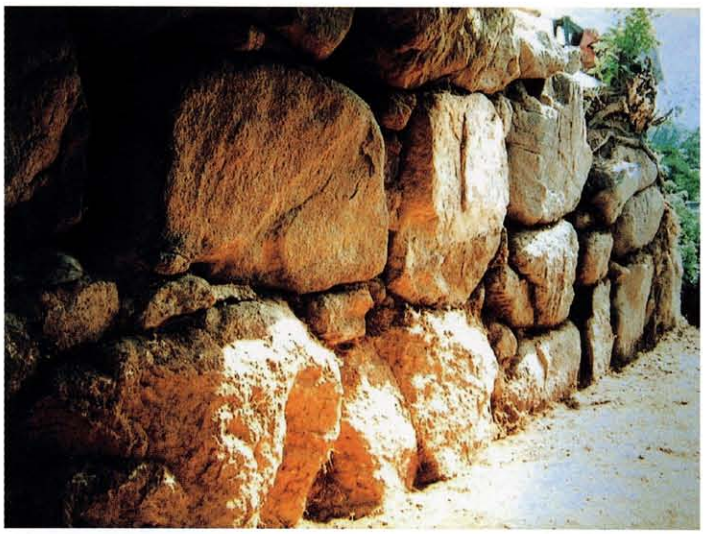

写真22　左側壁

写真23　出土状況

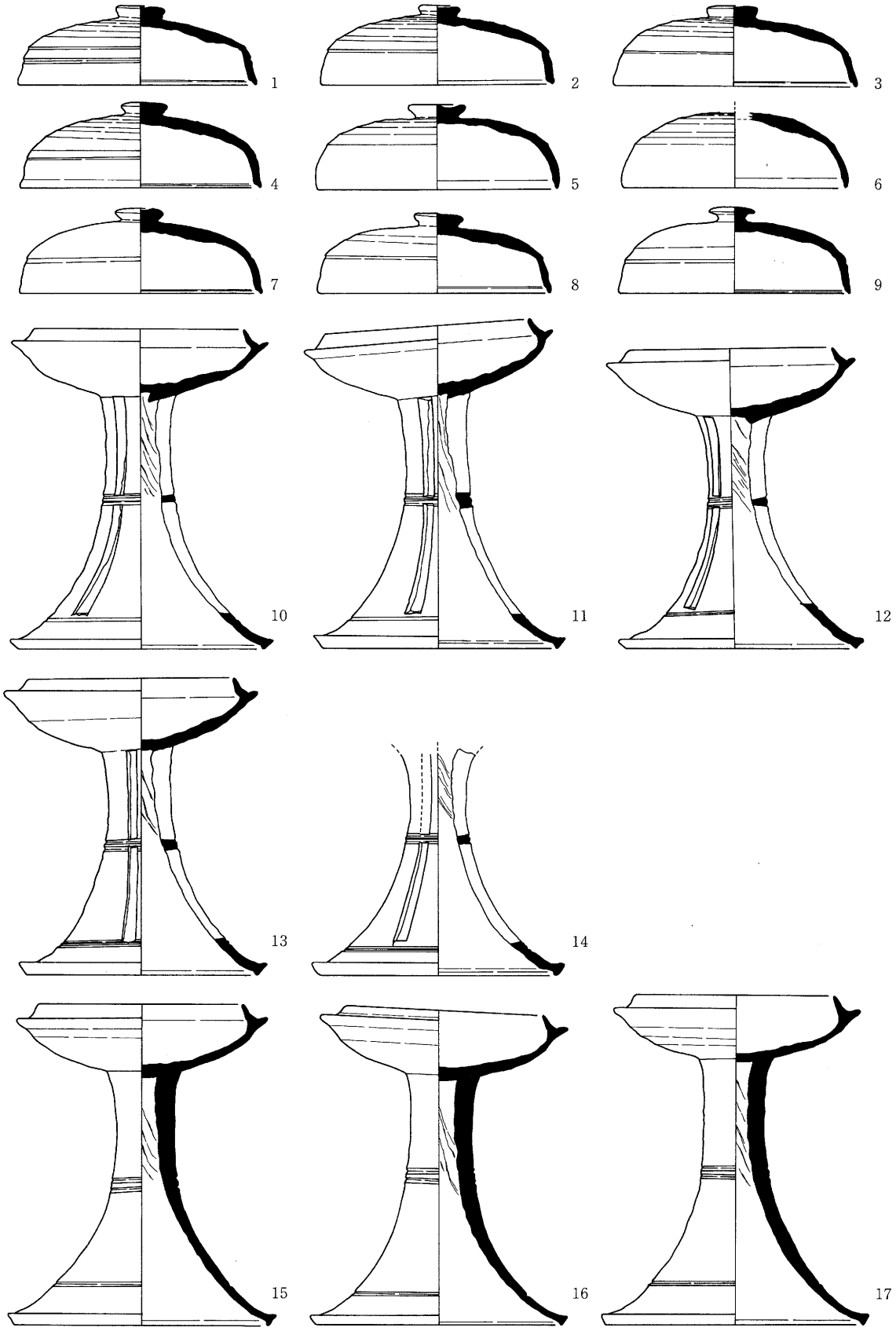

図13　出土遺物（1）（S＝1／4）

22.2㎝、坏部径13.3～14.0㎝、脚部径15.4～17.3㎝を測る。脚部内面に顕著に遺る。透かしは長方形で２段、３方に空く。

台付長頸壺26は器高24.4㎝。脚部上部の２方向に長方形透かしが空く。

器台24は器高40.4㎝を測る。台部には外面に平行タタキ、内部には同心円の当て具痕が遺る。筒部から脚部にかけては上部から長方形の透かしが縦一列に３段で３方に、そして三角形の透かしが１段上方の長方形透かしと位置をずらして３方に空く。それぞれの段は２条の凹線状沈線で区切られる。

石棺片はコンテナ２箱分を採取した。二上山西麓産の凝灰岩以外に白色あるいは緑灰色を呈する「高室石」を多く含む。部材には組み合わせることを想起させる細工が施されているものがある。そのうち２点を図示した（図15・16）。２点とも破片であり全体の形状は知り得ない。27は長さ37.0㎝、幅14.8㎝、厚さ6.0㎝を測り、片面に幅4.5㎝、深さ1.0㎝の溝が穿たれている。表裏に幅0.8㎝

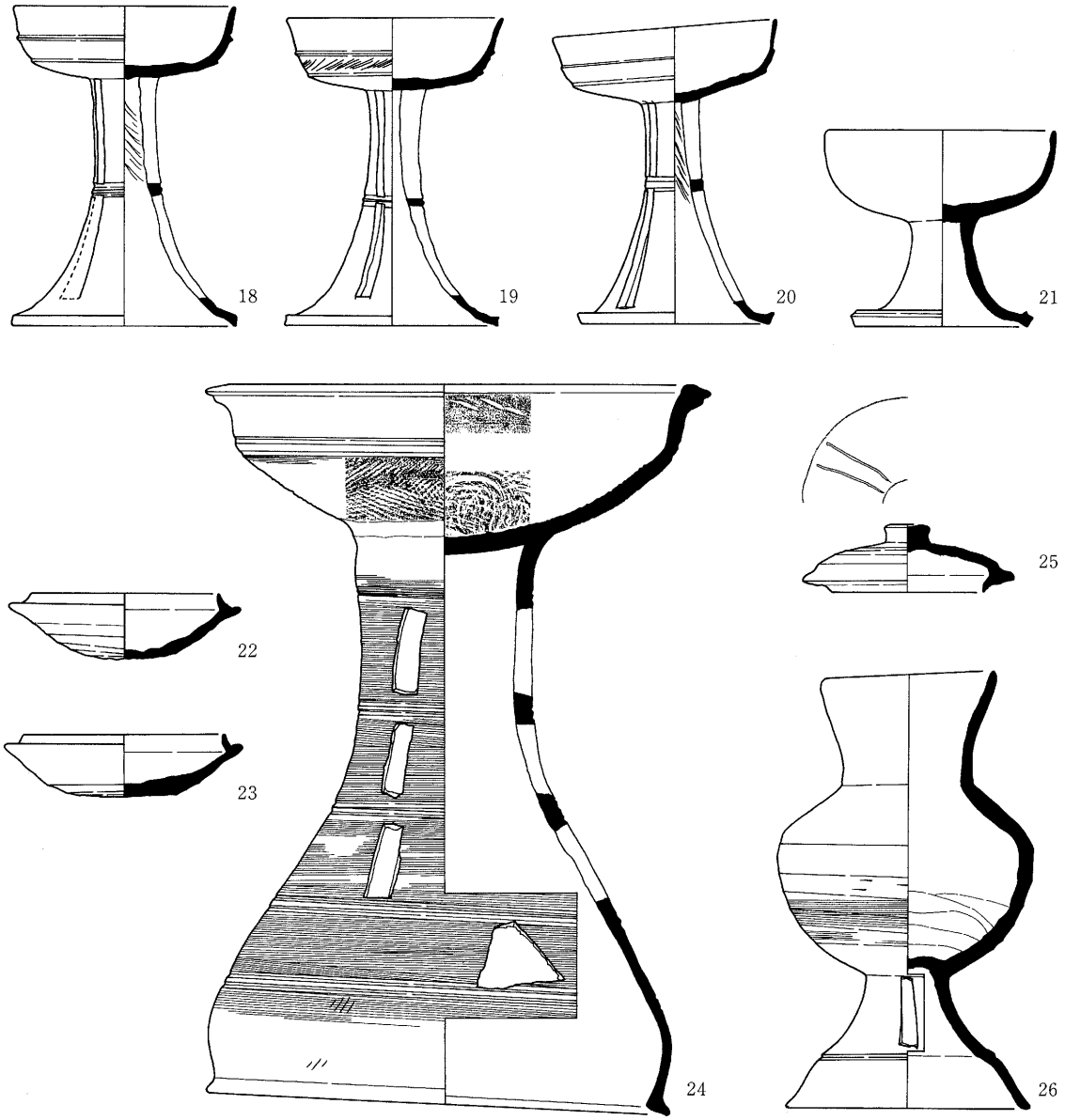

図14　出土遺物（２）（Ｓ＝１／４）

前後の工具痕が顕著に遺る。朱の塗布も認められる（図中網点で図示）。小口面に溝を穿つ際の設計線であろうか「井」状の沈線が見られる。28は長さ34.5㎝、幅17.0㎝、厚さ6.0㎝を測り、片面に幅4.9㎝、深さ0.9㎝の溝が穿たれている。小口には石棺構築時に組み合うよう0.5㎝程度の突起を削り出している。同規模の破片がもう1点（写真25後方）あり、長さ35㎝、幅19㎝、厚さ9.5㎝を測り、長辺の片面を切り欠く。一部に朱が遺る。

須恵器から、6世紀後半から7世紀初め頃に少なくとも2度の埋葬があったものと思われる。

写真24　主要遺物

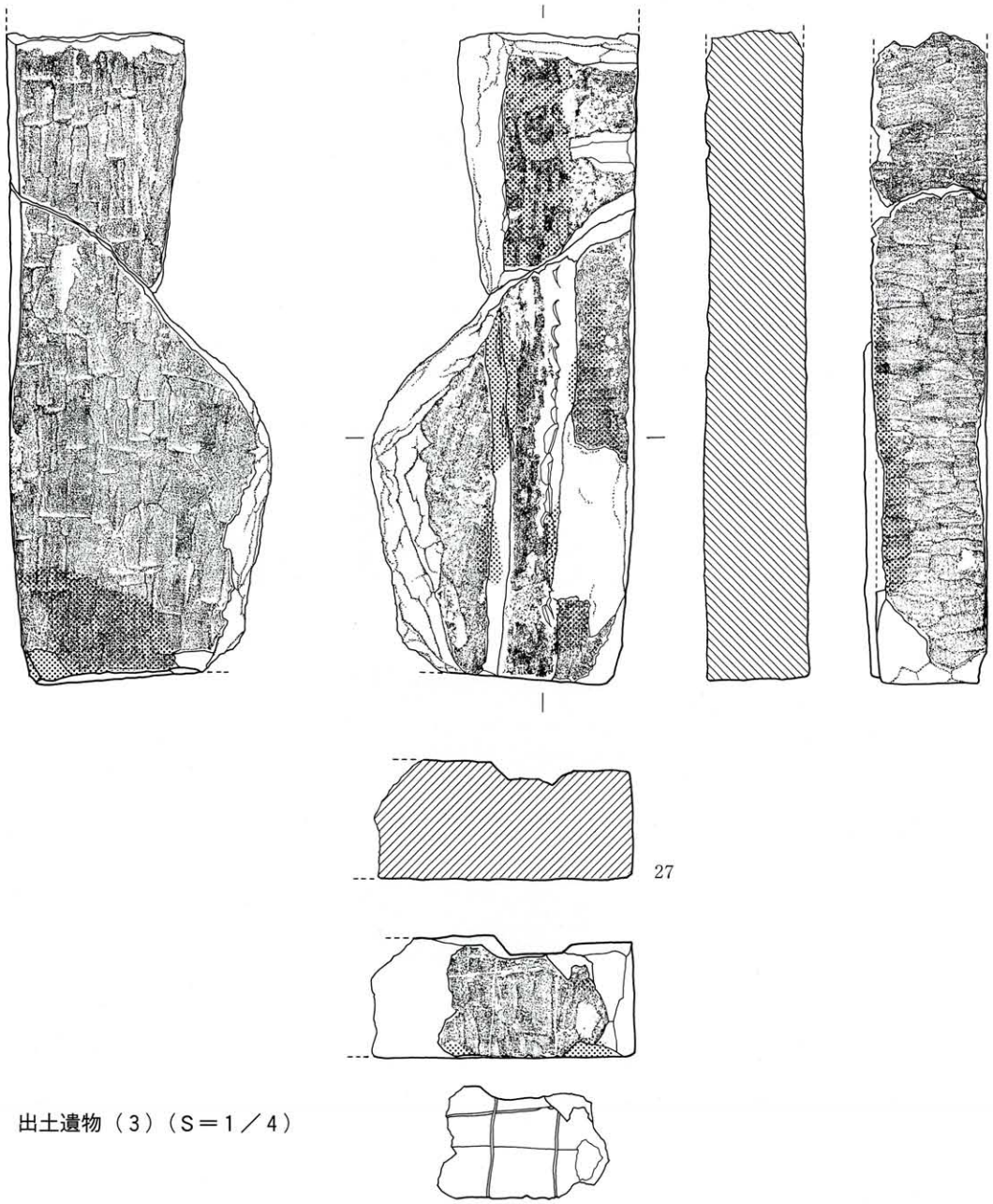

図15　出土遺物（3）（S＝1／4）

写真25　石棺片

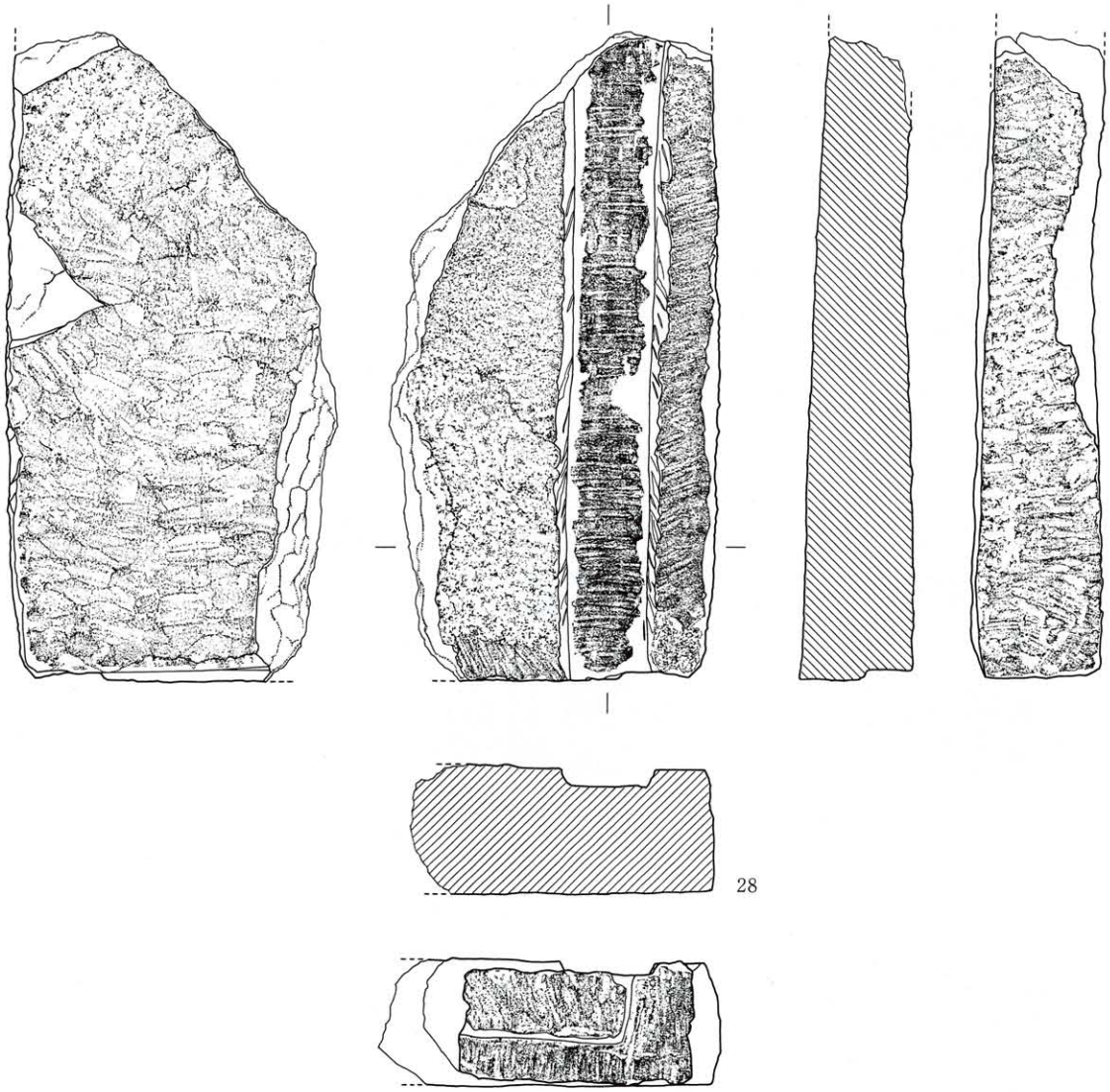

図16　出土遺物（4）（S＝1／4）

3.第6支群2号墳

先述の1号墳から東に15m隔たる。石室長200㎝以上、幅240㎝、高さ270㎝を測る。主軸は磁北から西に約34°振っている。石室内部は中近世に数度盗掘を受けているのか、当該期の土器陶磁器類が石室埋土に混在し、床面近くでは、火を使用した状況も看取された。近現代には石室構成材の採取も行われたようで、1石のみ遺る天井石には矢痕が見られる。埋土の厚さは約160㎝で、上半には遺物を全く含まない。

出土遺物として須恵器、瓦器、石棺材、銭貨がある。須恵器は短脚高坏、広口壺である。石棺片は砕かれた状態で埋土に混じっており、コンテナ2箱分を採取した。二上山西麓産の凝灰岩が主である。縄掛突起状の細工を施した部材も見られる。銭貨は「天聖元宝」で直径2.5㎝を測る。

写真26　6－2号墳

「平尾山古墳群平野大県第６支群１号墳、同２号墳出土石棺材の石種」　　奥田　尚

平野大県古墳群第６支群１号墳、同２号墳から出土した石棺材の破片を肉眼で観察した。１号墳から出土した石棺材の石種は、石英安山岩質凝灰岩、石英安山岩質溶結凝灰岩、流紋岩質凝灰角礫岩Ａであり、２号墳から出土した石棺材の石種は、石英安山岩質火山礫凝灰岩Ｂ、流紋岩質凝灰角礫岩Ｂである。これら石種の特徴とその採取推定地について述べる。

・石種の特徴と採取地について

石英安山岩質凝灰岩：色は淡灰色で、層理面がある。層理面に沿って割れている。構成粒は、火山ガラス、石英、長石、輝石である。火山ガラスは無色透明、粒形が束状、貝殻状、フジツボ状で、粒径が0.3～0.7㎜、量が中である。ガラス質部が溶けて、形のみが残る。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～0.3㎜、量が多い。稀に、灰色透明の石英が見られる。灰色透明の石英は、粒状で、粒形が角、粒径が0.2～0.3㎜である。長石は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～0.3㎜、量が多い。輝石は黒色透明、粒形が亜角、粒径が0.2～0.3㎜、量がごくごく僅かである。基質は灰白色透明で、孔が多い。

このような岩相を示す岩石は、加西市高室付近に分布する流紋岩質溶結凝灰岩の岩相の一部に似ている。石材名としては高室石の範疇に含まれる。

石英安山岩質溶結凝灰岩：色は青灰色である。裸眼では認められにくいが顕著な溶結を示す。構成粒は、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、輝石である。砕けているものが多い。火山ガラスは、粒形が束状、貝殻状、球状で、粒径が0.3～0.5㎜、量が多い。ガラス質部が溶けて、形のみが残る。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～0.3㎜、量がごく僅かである。複六角錐をなす石英が見られる。長石は無色透明、灰白色透明、粒形が角、粒径が0.3～0.7㎜、量が僅かである。短柱状で自形をなすものが多い。黒雲母は黒色、粒形が角で、粒径が0.3～0.4㎜、量がごくごく僅かである。輝石は黒色透明、短柱状で、粒形が亜角、粒径が0.2～0.3㎜、量がごくごく僅かである。ごく稀に、１㎜に達するものがある。基質は青白色、ガラス質である。

このような岩相を示す岩石は、加西市高室付近に分布する流紋岩質溶結凝灰岩の岩相の一部に酷似する。石材名としては高室石の範疇に含まれる。

流紋岩質凝灰角礫岩Ａ：色は灰白色で、黒色と白色の粒が点在する。構成礫種は流紋岩、流紋岩質溶結凝灰岩、軽石である。流紋岩は灰色、粒形が亜角、粒径が７㎜である。石基がガラス質である。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色、粒形が亜角、粒径が２～15㎜、量が多い。稀に、粒径が８㎝に及ぶものもある。軽石は黄灰白色、粒形が亜円、円で、粒径が２～30㎜、量が多い。稀に、粒径が７㎝に及ぶものもある。基質は黄灰白色で、緻密である。

このような岩相を示す岩石は、二上山西麓に分布する二上層群下部ドンズルボー層の溶結していない岩相の一部に酷似する。採石場所としては南河内郡太子町牡丹洞の東方付近が推定される。

石英安山岩質火山礫凝灰岩：色は灰色で、亜円～円礫の軽石の塊である。軽石は、黄灰白色と灰色のものがある。黄灰白色の軽石は、粒形が円、粒径が１～20㎜、量が非常に多い。この軽石には、

稀に、粒径が0.5㎜程度の輝石の斑晶がごくごく僅かに認められる。灰色の軽石は、粒形が亜円、粒径が２～15㎜、量がごく僅かである。粒状をなす黒色の物質は、粒径が２～３㎜、量が僅かである。基質は灰色で、緻密である。

スコリアの塊のようであり、火山噴出物の下部によくみられる石である。このような岩相を示す岩石は加西市から高砂市にかけて分布する石英安山岩質溶結凝灰岩の最下部の岩相の一部に見られると推定される。同質の岩石が分布する場所を確認するに至っていない。

流紋岩質凝灰角礫岩Ｂ：色は灰白色で、黒色と白色の粒が点在する。構成礫種は流紋岩質溶結凝灰岩、軽石である。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色と茶褐色のものとがある。黒色の流紋岩質溶結凝灰岩は、粒形が角、亜角、粒径が３～20㎜、量が多い。茶褐色の流紋岩質溶結凝灰岩は、粒形が亜円、粒径が40～45㎜、量がごくごく僅かである。軽石は白色、粒形が亜角、粒径が３～15㎜、量が中である。基質は灰白色、緻密である。

このような岩相を示す岩石は、二上山西麓に分布する二上層群下部ドンズルボー層の溶結していない岩相の一部に酷似する。採石場所としては、黄褐色の流紋岩質溶結凝灰岩の礫が含まれることから、南河内郡太子町鹿谷寺跡の北方付近が推定される。

・高室石の石棺について

高室石を使用している石棺についての研究はあまり進んでいないと言えよう。播磨系石棺材としては、伊保山付近の龍山石、池付近の龍山石、加西市の長石、同市の高室石がある。高室石の使用は、加西市の玉丘古墳の長持形石棺に始まると言える。河内、大和、山城に於いても、高室石を使用している石棺は若干の古墳に見られる。河内では、八尾市神立にある芝塚古墳の奥棺、愛宕塚古墳出土の石棺片、柏原市山ノ井瑠璃光寺の石棺仏である。大和では平群町西宮の烏土塚古墳前棺である。山城では向日市の物集女車塚古墳棺がある。ここに挙げた石棺は全て組合式家形石棺である。石材の使用傾向がわかる棺で判断すれば、芝塚古墳奥棺は石棺材の全てが高室石である。物集女車塚古墳棺は高室石と牡丹洞東方付近の石が使用されている。ここに挙げた古墳は独立墳であり、比較的規模が大きな古墳である。今回の調査で、群集墳にも使用されていることが明らかとなったと言える。

第４章　奥山遺跡

1997-１次調査

・調査対象地　柏原市旭ヶ丘４-4985-１　他

・調 査 期 日　1997年１月27日～９月19日

・対 象 面 積　43,200㎡

図17　対象地位置図

１.調査概要

当該調査は1996年度と1997年度に原因者負担事業として実施した、西名阪自動車道柏原料金所新設に伴う発掘調査である。発掘調査では、サヌカイトを含有する礫層の地山を穿つ直径100～300㎝、深さ50～200㎝を測る土坑を多数検出した。石器の未成品、欠損品も多数出土したことから、弥生中期頃の石器生産遺跡と想定した。その概要は1998年３月に『奥山遺跡発掘調査概報（柏原市文化財概報1997-Ⅳ）』として刊行した。古墳時代遺物については未掲載であったので、ここに報告するものである。

図18に示した土器は、調査Ｂ区の西端、表土下約50㎝の地山直上近くで出土した。遺構に伴うものではない。対象地内にも古墳の痕跡は一切認められなかった。周辺に目をやると、谷を挟んで南西約400ｍの西向き斜面に古墳時代後期の古墳群とされる「誉田山古墳群」がある。盗掘等によりそこから持ち出され、この場所に廃棄したものかとも思われる。

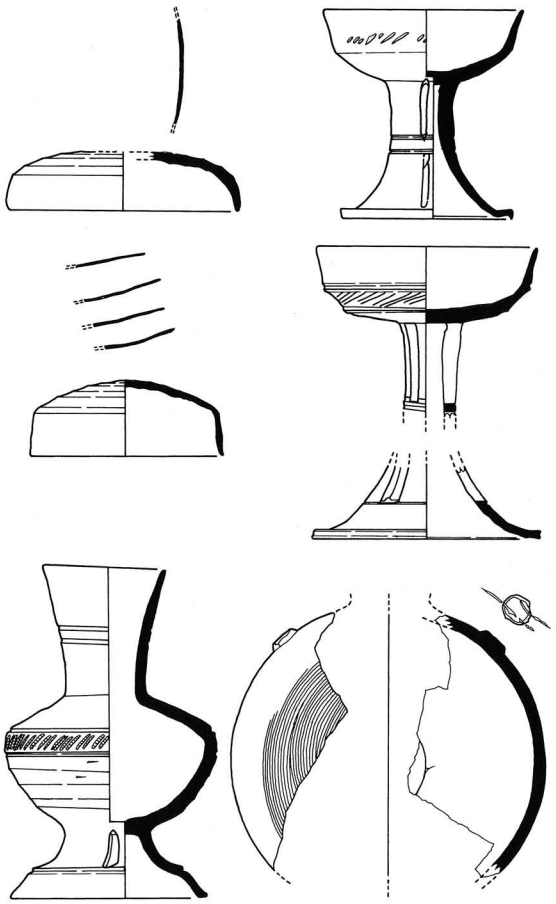

図18　出土遺物（Ｓ＝１／４）

報告書抄録

ふりがな	かしわらしいせきぐんはっくつちょうさがいほう
書名	柏原市遺跡群発掘調査概報　2000年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	柏原市文化財概報
シリーズ番号	2000-Ⅲ
編著者名	石田成年
編集機関	柏原市教育委員会
所在地	〒582-8555　大阪府柏原市安堂町1-43　TEL 0729-72-1501（内5134）
発行年月日	2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
船橋（ふなはし）	大正（たいしょう）3丁目	27221	FH2000-1	34度35分03秒	135度37分21秒	19990928～20001002	827㎡	店舗
平尾山（ひらおやま）古墳群	雁多尾畑（かりんどばた）	27221	HYK1993-1	34度34分41秒	135度38分44秒	19930106～19930113	2,195㎡	農地改良
	青谷（あおたに）	27221	HYK1993-2	34度34分39秒	135度38分47秒	19930301～19930312	9,890㎡	農地改良
大県（おおがた）	平野（ひらの）2丁目	27221	OG1998-7	34度35分27秒	135度38分12秒	19981007～19981109	1,461㎡	宅地造成
奥山（おくやま）	旭ヶ丘（あさひがおか）4丁目	27221	OY1997-1	34度34分07秒	135度38分41秒	19970127～19970919	5,000㎡	料金所

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	調査期間	特記事項
船橋	集落	近世	土坑		
平尾山古墳群	古墳	古墳	横穴式石室	須恵器、土師器	
平尾山古墳群	古墳	古墳	横穴式石室	須恵器、土師器、鉄製品	
大県	古墳	古墳	横穴式石室	須恵器、土師器、石棺、銭貨	
奥山	生産遺跡	弥生	土坑	サヌカイト、須恵器、土師器	

柏原市遺跡群発掘調査概報

2000年度

編集・発行　柏原市教育委員会

〒582-8555　大阪府柏原市安堂町1-43

(0729)72-1501

発行年月日　2001年3月31日

印　　刷　株式会社中島弘文堂印刷所